

日本酒一辺倒でも肉が好き 若山牧水にみる酒仙の横顔

わが国の詩人や作家の中で、もっとも多くの“文学碑”を誇るのが若山牧水。その名歌の数々を刻んだ各地の歌碑が、牧水の足跡の広さと歌人としての偉大さを改めて思い知らせてくれるのである。その牧水は

○幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく
に代表される旅の歌人として、また

○津の国は酒の国なり三夜二夜飲みて更なる旅つづけなむ

○昨日飲みけふ飲み酒に死にもせで 白痴笑ひしつなほ旅路ゆく

などの酒の詩人として知られるが、なかでもその晩年の酒仙ぶりは、朝に二合、昼二合、夕に六合が日常で、これに來客や酒席が加わることに際限なく酒量が増えた。その牧水が

○うまきものころろにならべそれこれと くらべ廻せど酒にしかめや

と歌っているところからみても、酒の肴など二の次、三の次。好みがあったとしても、魚介類や、酒向きのそれに限られていたのでは？と思われるが、案に相違して

○うまき肉たうべて腹の満ちぬれば 壁にもたれていねぶりをする
といった並々ならぬ肉への嗜好を見せているのである。



「旅とふる郷」と題する紀行文集には、焼き肉について「青年は、恍惚として大きな杯を置きながら、前に置かれた焼肉の一片を切り取って噛みしめた。ついぞ覚えぬ鮮かな味覚を誘う、空腹の身に浸み渡ってゆくその味わいは、久しく忘れていた遠い追憶をこの青年の上呼び起さしむるに十分であった。焼肉、焼肉——と、その肉嗜好が通り一遍のものでなかったことを思わせる文章を残している。

さらに、同じ「旅とふる郷」には、猪肉について「獵師の山刀を借りて大きな串を作る。そして、勢子から渡された猪の臓腑や肉の断片をそれに突きさして、燃え立った火の中に投するのである。そして、火の周囲を円く取巻きながら、焼け滴る肉の脂肪の音と匂いとに聞き入りつつ、眼を輝かしてその焼くるのを待っている」と、シシ肉バーベキューについても語っている。ただし、肉好きの日本酒党というのは、戦前ではいかにも異色だった！